

不撓不屈

ふとうふくつ

アトピーやアレルギーといった言葉が日常的に使われるようになって久しい。スギやヒノキの花粉症は春先に多くの人を悩ませ、食品が原因となるアレルギーは幼い子供を持つ親にとって無関心ではいられない。

国際規格で最高

龍宮はそんなアトピーやアレルギーに悩む人々に対し「綿」の可能性を追い求めながらモノづく

龍宮

①

「綿」の可能性追求

りに励んできた。主力商規格外00」で最高クラスの「パシーマ」は中綿の認定も受けた。

に脱脂綿、生地にかーせ 脱脂綿とカーセによるという組み合わせの寝 独自の組み合わせによつて生み出される吸水性や漂白剤などの「足し算」が基本の一般的な寝具とは異なる。不純物を取り除き、素材の特性によるシンプルさを求めて開発にたどり着いた。

「赤ちゃんがなめても安心」と自信を持つ製品は1992年に発売した。以来、品質やデザインに関する多くの受賞歴を持ち、繊維製品の国際安全基準「エコテックス

行動力受け継ぐ

しかし第二次世界大戦後の混乱期に創業し、多くの分岐点を経てきた龍



主力の「パシーマ」は健康や快適さに敏感なユーザーの支持を広げる

ていた叔父の「脱脂」た。そして、東へ西へと綿は清潔で体に害が 駆け回る礼一郎の姿勢を「ない」という言葉を 恒三は受け継いだ。信じ、製法開発にま 知恵と工夫で

一郎の姿を三男で現 社である「誠意と努力の恒三は「こた力」「技術の向上」「生 わりが強く口うるさ 産の奉仕」は、器用では 人だった」と笑い ないが浮き沈みを繰り返

組み合わせで健康寝具に

宮のこれまでの歩みは、 ながら振り返る。一方で しながら、ひたむきに歩 おとき話のように穏やか 「常に目新しさや先進性 ってきた会社の姿勢と重 を追い求めて動き続けて なる。

創業者の梯礼一郎 いた」と礼一郎の行動力 モノのインターネット (IoT) や人工知能

(AI)といった言葉があふれる昨今。決して最先端とは言えないモノづくりの現場は、知恵と工夫の積み重ねで築き上げてきた。ただ、社名のイ

メージとは裏腹にシエックトコースターのような展開で現在へとつながっていく。(敬称略)

▽所在地 福岡県うきは市吉井町新治278、0

943・75・3148

▽社長 梯恒三氏▽従業員 40人▽創業 47年

(昭22) 8月▽資本金 2800万円▽売上高

4億円(17年4月期見込)

▽URL <http://www.pasima.com/>

不撓不屈

ふとうふくつ

煙突がシンボル

大分県との県境に位置する福岡県うきは市。ブドウやイチゴ、柿といった農産物の栽培が盛んで九州最長の筑後川が流れる。

そんな自然豊かな土地に高さ25層の煙突がそびえ立つ。寝具メーカー、龍宮(うきは市)の象徴とも言える煙突は半世紀以上にわたって街を見渡してきた。

龍宮

(2)

2度目の工場火災

創業者の梯(はし)礼一郎が福岡県田主丸町(現在の福岡県久留米市)に「亀王製綿所」を創業したのは1947年(昭22)。

礼一郎は中古の機械を買いそろえ、古い布団などから糸を紡ぐ特殊紡績原綿を綿にしたり古綿を打ち直したりする綿工場に乗り出す。54年には同家に生まれた礼一郎(市)に移転。翌年には脱脂綿の製造を始め、57年に社名を「りゅうぐうわ

の傍ら、機械を勉強し他社の工場を見学するうちに事業を立ち上げること

を思い描いた。10代のころには商売を学ぶため2度の家出を企てるなど、持ち前の行動力は創業前から発揮していた。

業容の拡大とともに生産ラインは手狭となり、現在の場所に移転したのは64年のこと。折しも東京オリンピックが開催さ

縮工程が全焼した。年末焼。この時も急ピッチで

業績拡大から一転窮地に



竣工当初の現工場(1964年頃)

れた時期と重なるに発生したため正月休み。小学生だった返上の急ピッチで復旧。現社長の梯恒三は同時にレイアウトを変更「従業員も総出でし、生産効率上昇した建設に携わって、以前よりも売り上げた」と当時を振り返り、社名を現在の「龍宮」に返る。象徴となる煙突もこの時に築改められた。

しかし、勢いに乗りながら拡大を遂げた。74年の2度目の致命的な事態。だが、74年の2度目の事態が好転しない中、77年にはついに不渡りを出すことになる。翌日から製造ラインが止まり、絶体絶命の状況。だが、ここから思わぬ形で現在へとつながっていく。

(敬称略)

不撓不屈

ふとうふくつ

再建へ事業集中

高度経済成長期の流れに乗って拡大を続けた寝具メーカーの龍宮(福岡県うきは市)。しかし2度の火事によって不渡りを出すに至り、窮地に追い込まれた。

落ちた信用を取り戻すことは容易ではない。不渡りを出したことで、製造を始めていた不織布やナフキンなどの分野からは撤退。確実に利益を上

龍宮

③

アイデアを結実

げられる脱脂綿の分野に集中した。ただ、再建の段階で資金繰りに苦心しながらも創業者の梯(はし)礼一郎は製品開発を水面下で進めていく。

自らを実験台に

「何でも自己流でいろいろと考えていた」と礼一郎の三男で現社長の梯恒三が語るように、礼一郎は自身のアイデアを頼りに具現化させていくタイプだった。窮地に追い込まれてもなお、新たな道を切り開くために模索を続けた。

礼一郎はアイデアを膨らませ、次第に実を結んでいく。1987年、ベニヤ板に多数の穴をあけた一面に脱脂綿と固綿を使った畳床「龍宮畳」を完成し、ヒットした。高温多湿な日本の住宅環境でタニやカビが繁殖するのとに目を付けての開発だった。

創業者の礼一郎は生涯にわたって製品開発に力を注いだ



改善しない。そんな中、幼い頃に叔父が聞かされた「脱脂綿は清潔で体に害がない」という言葉に行き着く。衣類や寝具を仕立てる段階では多くの薬品が使われ、湿疹の原因の一つともいわれる。対して脱脂綿やガ

発明考案で特賞

改良を始めた。試験錯誤を繰り返して開発を進め、92年に現在の主力製品となる「バシーマ」が完成する。前身となる製品から数えると10年以上の月日がたつてい

「健康寝具」として売り出したバシーマは、その独自性から93年には福岡県発明考案審査会で特賞を受賞する。その後も独自の健康法を考案しながら礼一郎は生涯にわたって開発を続けた。

発売から25年の間に、ポーター柄など品目を増やし、技術的な進歩も重ねた。今や龍宮にとってなくてはならない製品に成長した。だが、恒三は「まだまだ消費者にとつて目新しく映るよう知名度の向上が必要だ」と各地の展示会などでアピールを続ける。

専念する。

脱脂綿健康需要切り開く

ちょうどその頃、礼一郎が分からないまま病院に1ヶ月は医療用にも使われた。同時期に社長のいすはアトピー性皮膚炎の通い、塗り薬や飲み薬を肌で触れることでか

(敬称略)

不撓不屈

ふとうふくつ

30種に拡大

脱脂綿とガーゼを組み合わせた寝具「パシーマ」を主力製品とする龍宮（福岡県うきは市）。名称はバット、シーツ、マットの頭文字を取った。3種類から始め、発売25年の現在はパシヤマやマスク、タオルなどレパートリーは約30種に及ぶ。

龍宮

④

2012年に社長に就いた梯恒三は「自分た

モノづくりの精神

ちでできることは自分たの精神が息づく。

新生児に贈呈

「お金がない」と口癖のように言いながら会社を引っ張ってきた創業者の父、礼一郎の精神を、さまざまな創意工夫として受け継いできた。

操作開始から50年以上が経過した現工場では、既に市場に回っていない機械も現役で活躍する。時には故障し、メンテナンスが必要となるが、「自己流でアレンジしながら工夫する」（恒三）など、目新しさばかりを追い求めないモノづくり

蓄積を宝に「創意工夫」継承



パシーマへの思いを受け継ぐ梯社長

「パシーマへの思いを受け継ぐ梯社長」は「当時から従業員が総出となっていたんだ」としみじみと振り返る。一方、不渡りを出すと「気が見せるげ花火のようになっては意味がない」と穏やかな口調で語る。ただ、身の子供の成長に「丈にあつた展開を意識し、思いがあつても成功して枝葉が伸びれば」と次なる一歩に

「当時から従業員が総出となっていたんだ」としみじみと振り返る。一方、不渡りを出すと「気が見せるげ花火のようになっては意味がない」と穏やかな口調で語る。ただ、身の子供の成長に「丈にあつた展開を意識し、思いがあつても成功して枝葉が伸びれば」と次なる一歩に

「お客さまに返信を要求している訳ではない」と語るが、会社には毎日のように届く。その内容は商品への要望や提案、クレームなど多岐にわたる。それだけに「蓄積は宝」

と届いたすべての「宝」にはできない」と自社を保管しているという。14年には地域貢献の一環で地元うきは市の新生児にパシーマを贈呈する

「次なる一歩へ」猪突猛進に突き進んだし、鑑賞した。白黒の映像にある会社の姿に恒三た

17年には創業から70年を迎えた。最近、過去の8ミリフィルムを編集し、鑑賞した。白黒の映像にある会社の姿に恒三た

時代の波に翻弄されながらも、会社は月日を歩んできた。決して早くはないが亀のようにゆっくりと。これからも着実に歩みを進めていく。

（敬称略）

（この項おわり。西部

高田圭介が担当しまし

た）